下町文化
NO. 270
2015.7.10

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.lg.jp/

江戸名所

洲崎の風景と波除碑

上:「江戸名所図会　洲崎弁財天社」下:広重「江戸名所　洲崎弁天境内」
※いずれも部分(国立国会図書館所蔵)

○江戸名所
洲崎の風景と波除碑
○文化財の修復
二つの波除碑
○文化財説明板の紹介
旧葛西橋跡
○平成27年度芭蕉記念館前期企画展
◆江戸の俳檀
ー嵐雪と雪門・雪中庵の俳人たちー
◆江戸における芭蕉
ーその生活と住いー
○江東の古道をゆく⑤
十方庵敬順が歩いた本八幡への道(2)
○第33回(平成二十六年度)時雨忌記念講演会録
芭蕉と私ー芭蕉の享年を越えてー
○ここにも歴史があった
民俗資料の展示

江戸時代の洲崎

深川の洲崎は、景勝地として知られる名所でした。画を見てもわかるように、洲崎弁財天（現洲崎神社）のすぐそばまで海が迫り、そこから眺める風景はまさに絶景だったようです。そこには、海に面して葦簀張（よしずばり）の茶店が設けられており、多くの人で賑わっている様子が描かれています。絵師によって描かれたその風景は、埋立てが進み、ビルが林立する現在の町の姿からは想像もできません。

また、洲崎の海は潮干狩りを楽しむ場でもありました。潮が引くと人々は海に出かけ、さまざまな魚介類を採りました。描かれた江戸前の風景からは、その豊かさが伝わってきます。幕末の「本所深川絵図」を見ても、過去の水害で大きな被害を受けた洲崎付近を除き、海沿いは大名屋敷で埋め尽くされています。船が大量の物資輸送の手段であった当時、海沿いは利便性が高く、加えて風景も楽しめたのです。

ところで、上の画を見ると、洲崎弁財天の門前に一本の石碑が描かれています。これは、「過去の水害」の後に建てられた、「波除碑（なみよけひ）」と呼ばれるもので現存しています。次頁で詳細を記していますので、ぜひご覧ください。

文化財の修復
二つの波除碑

波除碑は、いまから220年ほど前の寛政6年（1794）に建てられた2本の石碑で、現在は洲崎神社（木場6-13-13）境内に1本、そこから500mほど西側の平久橋西詰（牡丹3-33付近）に1本建っています。

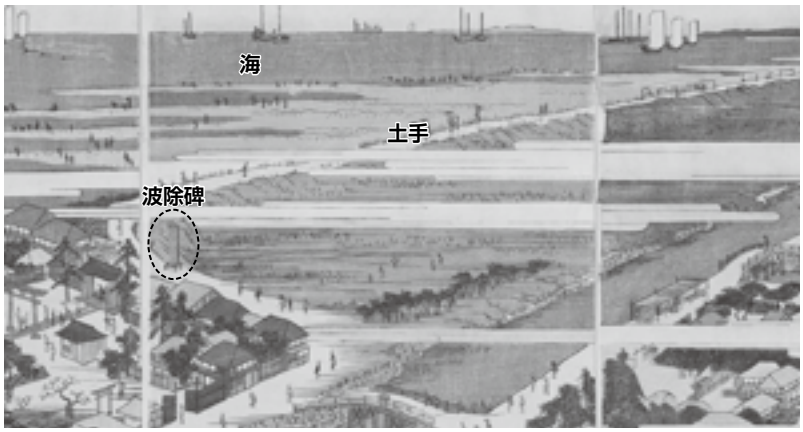
波除碑が建てられた契機は、寛政3年（1791）に起こった高潮の被害でした。同年9月3日に降り始めた大雨が、翌4日午前中の満潮時には暴風雨となり、この付近一帯に高潮が来襲しました。その水害で家屋が流されただけでなく、多数の死者・行方不明者を出したのです。そのため、幕府は海沿いの土地5467坪余を買上げ空地として、家を建てることを禁じました。その3年後、空地の北側両端に石碑を建て、その目印としたのです。この石碑が波除碑と呼ばれるものです。いずれも都指定文化財になっている貴重なものですが、震災や戦災の被害を受け、ひどく破損していました。そこで、平成26年度に修復が行われました。

2本のうち、洲崎神社の碑は4隅に鉄筋が添えられ、周囲の大部分をモルタルで固めた状態で、碑本来の形状がわかりませんでした。そこで、今回は鉄筋とモルタルを除去し、石碑だけの姿に戻す作業が行われました。

作業の過程で姿を現した波除碑は、上部が欠損し、全体的に破損が見られるなど、形状が整っているものではありませんでした。このことは、平久橋の波除碑も同様で、上部のほぼ3分2は欠損し、残る部分もかなりの破損が見られます。

しかし、それら2本の形状は、現在に残された碑の歴史であり、幾多の災害の痕跡そのものです。その痕跡にこそ、後世に伝えるべき地域の歴史が込められているのです。

文化財主任専門員　出口宏幸



広重「東都名所洲崎弁財天境内全図　同海浜汐干之図」（部分）

洲崎神社碑　修復前（右）と修復後（左）

文化財説明板の紹介
旧葛西橋跡

教育委員会では、江東区登録史跡や江東区指定文化財の所在地に文化財説明板を設置し、ゆかりの歴史や文化などを紹介しています。このたび、旧葛西橋が架橋されていた付近に、新たに文化財説明板を設置しました。設置場所は、現在の葛西橋の上流に位置する、荒川右岸の河川敷に設けられた遊歩道沿いです（地図参照）。

旧葛西橋は、昭和3年（1928）に東砂5-15、6-17から江戸川区の間に架橋された橋で、長さ696・4メートル、幅員6・1メートルの架橋当時は東京で最長の橋でした。正確には、荒川放水路に架けられた長さ549・1メートルの葛西橋と、中川放水路に架けられた長さ147・3メートルの葛西小橋に分かれます。旧葛西橋は、荒川・中川放水路の開削によって隔てられた江東区と江戸川区を結ぶ重要な橋でしたが、自動車の交通量の増加や橋の老朽化のため、昭和38年（1963）に新しい葛西橋が下流に架橋され、旧葛西橋は廃止されました。

散策の際などにぜひご覧ください。

平成27年度芭蕉記念館前期企画展

◆江戸の俳壇―嵐雪と雪門・雪中庵の俳人たち―
◆江戸における芭蕉―その生活と住い―

6月25日(木)～12月20日(日)まで

孔子の優秀な弟子10人を称して孔門十哲といいます。これに擬えて芭蕉の優秀な俳家を蕉門十哲と呼称します。許六は、『本朝文選』の「師の説」の中で「其道を継十哲の門人」と語っていますが、その10人が誰であったのかは不明です。『続俳家奇人談』に所収する蕪村の画賛には、其角・嵐雪・支考・許六・去来・丈草・野坡・越人・北枝・杉風の10人を描いています。しかし、さまざまな蕉門十哲の画像を見ると、人物が一定している訳ではありません。ただ、其角と嵐雪は蕉門の双璧とされ、そこから外されることはなかったのです。

江戸の俳壇は芭蕉の没後、江戸座の其角系と沾徳系が主流となりますが、嵐雪の雪門や素堂の葛飾派など、多くが俳諧集団を形成していくことになります。その拠点は、例えば素堂を祖とする葛飾派が桃青寺（墨田区東駒形）であり、嵐雪を祖とする雪門が要津寺（同区千歳）でした。

今回の展示では、嵐雪を祖とする雪門の俳人を取り上げています。雪門の俳人の正統は「雪中庵」を継承します。服部嵐雪を初世とし、2世桜井吏登―3世大島蓼太―4世大島完来―5世大島対山―6世山本椎陰―7世村井鳳州―8世服部梅年―9世斎藤雀志―10世杉浦宇貫―11世清水東枝―12世増田龍雨と続きました。

嵐雪は、其角とともに江戸蕉門を二分したとされ、多くの俳書に画像が残されています。作品では、渡辺崋山の描いた嵐雪肖像や、描いた画人は不明ながら肉筆で桜井梅室が嘉永3年（1850）に折本仕立にした『古哲俳家三十六俳仙』中の嵐雪肖像のほか、俳書に載るさまざまな嵐雪の肖像を展示しています。

2世の桜井吏登は、生前、わずか18句を除き、句稿を焼却したといわれます。その後、門人により『吏登句集』が刊行され、119句が拾い集められました。展示では、吏登の珍しい「狼とおなじ山をや時鳥」の短冊を初公開します。

桜井吏登筆「狼と」句短冊

3世の大島蓼太は、雪中庵隆盛期の俳人で、俳書200種、文台を許した輩40、門人3000人とも伝えられています。そして、この蓼太は、要津寺に芭蕉庵を再興し、多くの芭蕉の顕彰活動を活発に行っています。明治42年（1909）1月号の『ホトトギス』に載る中村不折の「深川芭蕉庵図」は、祖父庚建翁の原図をもとに描かれた模写です。従来、この絵は、江東区常盤付近の深川芭蕉庵のものと考えられていましたが、蓼太編の『芭蕉庵再興集』と比較すると、庭中の流路や土橋の位置などから、この絵の場所が要津寺だったことを特定できます。

4世の大島完来は、初め富増氏を名乗っていましたが、後に蓼太の養子になっています。作品としては、完来の「円相自画賛」（円相：禅で悟りの象徴として描く円形・丸のこと）を展示します。

8世の服部梅年は江戸深川の生まれで、雪中庵5世の対山に師事、明治7年（1874）に雪中庵を継承しています。梅年は同9年春に雪門の勢力挽回の一策として、深川富岡に芭蕉神社を創建しました。のちに寛政の頃に創建された花本社に合祀されます。作品は、梅年が80歳で芭蕉の「幻住庵の記」を揮毫したものです。展示では、初公開も含め、全24点を展示します。

大島完来 円相自画賛

また、中央の展示コーナーでは、「江戸における芭蕉―その生活と住い―」をテーマに、「◆江戸下向をめぐる諸説（Ⅰ）桃青寺と芭蕉（Ⅱ）杉風と芭蕉（Ⅲ）卜尺と芭蕉」、「◆深川移居以前の生活」、「◆深川移居の年次」、「◆深川芭蕉庵の位置（Ⅰ）第一次芭蕉庵（Ⅱ）第二次芭蕉庵（Ⅲ）第三次芭蕉庵」について、27点の資料をもとに取り上げています。

この機会に深川と芭蕉との係わりを、より掘り下げて見ては如何でしょうか。

【芭蕉記念館　問合せ】☎03（3631）1448

江東の古道をゆく⑤
十方庵敬順が歩いた元八幡への道（二）

前回（本誌２６７号）に引き続き、江戸時代の散歩好き十方庵敬順が歩いた元八幡（富賀岡八幡宮、南砂7-14）への道をたずねます。

前回は洲崎神社（木場6-13）から南砂六地蔵（南砂2-28）の辺りまでたどりました。六地蔵から元八幡へ続く道は、元〆川の沿道をもとに形づくられた道で、仙気稲荷通り・元八幡通りと愛称されています。今回は、この道を進んでいきます。

貨物線の踏切

では南砂六地蔵の辺りから歩いてみましょう。まっすぐ歩いて行くとＪＲ総武本線越中島支線の踏切を越えて明治通りに行き当たります。踏切は「締川踏切」と名付けられています。

元〆川由来であれば、「元」が無いのが何とも残念です。「元〆」とは、砂村新田の字名で、元〆川以南の南砂2辺りを呼んでいました。

疝気稲荷

明治通りを渡ったところから仙気稲荷通りになります。愛称名は昭和42年に習志野市へ移転した疝気稲荷にちなみます。現在、南砂3-4に稲荷がありますが、旧跡保存のために地元の方たちにより祀られているものです。由緒では、万治2年（1659）に砂村新田が開発された際、高波の被害を避けるために「江之嶋明神奥ノ院」を波除堤に勧請したといいます（砂村稲荷神社関係文書）。明治6年7月5日には砂村稲荷神社（旧社号は大智稲荷社）として村社に定められています。地元では「疝気稲荷」と広く呼ばれ、文化年間には「疝癪」（胸や腹がさしこんで痛む病気）の患いに霊験のある神として流行し始めたといいます（『武江年表』）。

砂村稲荷神社　昭和30年頃

疝気稲荷の噂を耳にしていた敬順も稲荷に立ち寄っています。

路傍なれば容体を見て行んものと、冬葱圃の中をゆく事壱町にして波除堤をかたとりて小祠あり、幟など四五本たて、、麁抹の仮宮にあがめたりけり（『江戸叢書』以下同じ）

おそらく敬順は元八幡へ行く途中で寄ったのでしょう。八幡への再訪は文化13年（1816）ですので、疝気稲荷の流行が盛んであった頃となります。流行神に対して批判的であった敬順の意見はさておき、稲荷周辺がネギ畑であったことや、稲荷が波除堤の側にあったという景観を今に伝えてくれたことは幸いでした。

砂村の景観

左の絵は、「砂村の春色」と題する小林清親の作品です（深川図書館蔵）。清親風景真画シリーズの1枚で、大正3～4年に頒布されたものです。何とものどかな農村の様子が描かれています。敬順が歩いた元〆川沿いの道もこのような雰囲気だったのでしょうか。

敬順は、元八幡へ行く途中、釣り人に出会っています。

此日快晴にして、時は閏八月ながら、九月の節に入て最早七八日目かとよ、冷気弥まし、吹風いと寒く、四方の梢の葉を震ふ様は秋の野ずへの淋しく、元より行路の人影稀なる川筋に飄々然々と釣する漁夫あり、扨は吹荒せし野外を物好に逍遊する我輩あり、何れが勝らん、気を養ふに至ては彼此同日の論たるべし

「此日」とは再訪した文化13年閏8月21日で、もう9月に入ったような寒さの中でした。敬順は、寒風が吹く中で釣りをする人にあきれながらも、振り返れば自分たちも物好きに散策していることに気づき、おかしみを感じたようです。敬順は、俗事（市中）から離れて「古雅」なる景勝地（近郊）を訪ねることを好んだ人です。砂村の淋しい風景は、敬順が鋭気を養うためには格好の場所でした。

三つ目の橋～庚申橋～

程なく川に添し三つ目の橋を越、右に付てゆく事拾余町、北は渺々と果しなき砂むらの耕地をながめつ、、洲崎の元八幡にこそは詣でき

元〆川沿いの道を歩いていた敬順は、「三つ目」の橋を渡って、砂村の広大な田園風景をながめながら歩き続け、元八幡にたどりついています。前回の訪問でも、**「三ツ目の板橋を左りへ越て又川にそひ、東へゆく事数拾町にして、堀留より右へまがりて」**と記しているように、敬順はやはり「三ツ目」の橋を渡って元〆川沿いを歩いています。

天保11年（1840）の絵図（次頁）を見ると、庚申橋から東南方向は道

天保11年8月　深川十万坪より中川海手迄（部分）　国会図書館蔵

が北側に付けられていることが分かります。敬順は橋を左へ越えたというので、三つ目の橋は庚申橋と思われます。ここは元〆川と東横川が接続する所で、東横川には八幡橋が架かっていました。

仙気稲荷通りを進んで行くと、まっすぐだった道が左にカーブしている所にさしかかります（写真①）。この辺りが庚申橋のあった所で（福島橋第二交差点）、左手に入る道は東横川の跡です。ここで道は北側へずれ、交差点を境に元八幡通りとなります。なお、大正2年に撮影した庚申橋の写真が『水彩抄』12号（江東区の歴史と文化を継承する会編、宇田川純正氏執筆）で紹介されています。

①

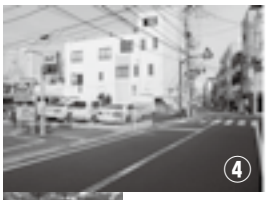
堀留にあった道標

元八幡通りを進むと丸八通りに行き当たります（写真②）。写真中央の建物の左手が元八幡通りで、右手の小道との間に挟まれた東西160メートル程の細長い区画が元〆川の雰囲気を伝えています。

まもなく元八幡通りは右へカーブします（写真③）。この辺りが堀留でした。明治43年発行の『東京近郊名所図会』には、川の尽きる所に「元はちまん道」と記した石標があると書いてあります。現在、元八幡境内にある道標のことです。道標は戦後になって境内に移されました。それまでは写真④中央の辺り（南砂6-10）にあったそうです。

②

③

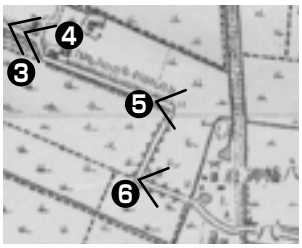

④

元八まん道道標

桜並木と波除堤

堀留から元八幡への道筋は、明治43年の1万分の1地形図（陸地測量部、右下）からうかがえます。『城東区史稿』（昭和17年）によると、道標のあった場所から元八幡へ向かう道の両側にはかつて桜の並木があって「桜道」と呼ばれ、開花の折には賑わったそうです。

では明治43年の地形図を参考にして歩いてみましょう。堀留からまもなく右手に折れて（写真⑤）、かつて桜並木であった道に入ります。さらに左手に折れると、前方に元八幡が見えてきます（写真⑥）。



⑤

⑥

元八幡に近づいた敬順はどのような風景を目にしたのでしょうか。

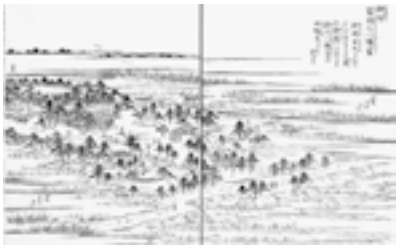
堀留より右へまがりて、既に洲崎近くならんずる辺より左右芦原にて中路一段高く、双方の行樹は花王のみを植ならべし事凡五町余さらに余木なし、若弥生の頃爰に遊行せば、桜の咲そろひしを見んものを残多し、斯てさくらの並樹を過て、右の方波除堤を歩行しつゝ、西より東の方迄を眺望すれば、目に障る物なく唯蒼海の青みたる風色いはん方なし

敬順は、桜が咲きそろっている時にくればよかったと思いつつ「桜道」を通り過ぎ、波除堤を歩きながら目の前に広がる雄大な海の青さに感嘆しています。波除堤は、元禄11年（1698）に幕府が深川から砂村新田にかけて築いたものです。4、5mほどの高さがあったので、堤の上から眺める景色は格別だったことでしょう。

名所江戸百景　砂むら元八まん

元八幡は古雅の勝地なり

境内に入った敬順は、人影も見えない閑寂の中に昔から移ろわぬ神地を見い出し、松の枝振りやわき水の清らかさに古風な優雅さを感じています。そして、西北は砂村の果てしなき耕地を見晴らし、東南は見渡す限りの青い海を眺めることのできる景色を愛で、「**久しく憩ひて飽ざるの地也**」と評しました。


江戸名所図会　砂村冨岡元八幡宮

（文化財主任専門員　栗原　修）

芭蕉と私 ～芭蕉の享年を越えて～

講師　小川 軽舟（「鷹」主宰）

芭蕉は漂泊の詩人として知られていますが、今日は芭蕉が日常生活をどう生きてどう作品にしていたかに焦点をあててみます。日常の中で芭蕉の芸術がどのように切り拓かれていったのか、そしてどういう思いで旅にのぞんだのかを話してみたいとおもいます。

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉

29歳で故郷の伊賀上野を離れて江戸に出た芭蕉は、10年足らずのあいだに知名度をあげて俳諧宗匠の地位を手に入れ、当時としては都会中の都会、江戸の日本橋に住んでいました。しかし、延宝8年、1680、37歳の冬にここ深川の草庵に隠棲したのです。芭蕉庵の名の由来になった芭蕉の木が台風にふかれてざわざわ音をたてている。茅舎（あばら家）の雨漏りが盥に落ちる音を聞きながら侘しい夜をしみじみ味わっているという句です。

櫓の声波を打つて腸氷ル夜や涙

なんだか仰々しい句ですね。芭蕉庵はこのあたりですから、隅田川あるいは小名木川をいきかう舟の櫓の波を打つ音が聞こえてくる。そういう夜にあばら家に一人でいると、寒さにはらわたまで氷ってしまいそうで一人さめざめと涙を落としている、という句です。日本橋での華やかな宗匠暮しだったのに、なぜか突然隅田川を越えて深川のあばら家に移り住み、ひとりぼっちの生活を始めたわけです。

以前、芭蕉を偲ぶ夕べという集まりで、金子兜太さんが「おれは芭蕉が好きじゃない」とおっしゃっていました。兜太さんは小林一茶が好きです。一茶に比べて芭蕉はきどっている、たかだか40過ぎで「翁」というのが気に入らない。金子さんは90過ぎてお元気ですからね。芭蕉はこの句に「乞食の翁」という文を寄せているので、深川に移り住んだ翌年38歳あたりから間違いなく自分を「翁」と言っているようです。

ほんとうに辛いのならさっさと日本橋に帰ればいいのに、ことさらがんばる。それは、新しい風流の道を切り開こうとしていたからです。芭蕉の試みは戦略的に成功しました。悲壮な決意をもって深川に移住した、その過剰な演出が「おもしろいやつがいるぞ」とアウトサイダーの文芸として認められていくのです。

やがて深川の暮しも落ち着いて39歳では、次のような句があります。

あさがほに我は飯食ふ男哉

弟子の其角の「草の戸にわれはたでくう蛍かな」に対して示した句です。自分はふつうに暮らして夜遊びもせず、朝顔が咲く朝には朝飯を食う男だよ、まっとうに生活するというのが自分なんだと宣言している句です。

春立つや新年ふるき米五升

昔は旧暦ですから、立春、春が立つのと、新年、新しい年がくるのとがほぼいっしょです。立春で新しい年がきたけれど、自分の侘び住まいには古米が五升あるだけだよと言っている。この米も自分で稼いで買ったものではない。乞食の翁として、弟子たちが生活もすべて世話をしてくれる。弟子たちに守られてほっとしている、安定した暮しができるようになったよ、そういう句だと思います。そういう状態になって、その年41歳の8月に、芭蕉は最初の旅である「野ざらし紀行」の旅に出ます。

野ざらしを心に風のしむ身哉

野ざらしとはしゃれこうべのことです。どこかで行き倒れて野にさらされるしゃれこうべになるかもしれない、それを心において風が身にしむ、そういう旅立ちだなあといっています。悲痛な決意ですが、やっぱりオーバーですよね。これもユーモアの句じゃないかなと思うところがあります。

この旅の一番の目的は、故郷の伊賀上野に久しぶりに帰ろうということでした。江戸にでて十数年がたち、お母さんの死に目にも会えなかった、その墓参りも果たしました。それから関西方面の弟子たちを訪ねたあと、名古屋の有力俳人たちと歌仙を巻きました。これが蕉風が世の中に広まった第一歩、といわれています。そして、大きな成果をあげて旅を終え、また深川へ戻ったのでした。芭蕉は42歳になっていました。

夏衣いまだ虱をとりつくさず

旅から戻った後の句です。旅の間に虱もついて、旅衣もぼろぼろになってその虱もとりつくさないよ、と、これも人に笑ってもらおうという雰囲気もありますね。自分の家に帰ってきたという雰囲気が出ていて悪くない句だと思います。

よく見れば薺花咲く垣根かな

芭蕉のこれまでの句は、古典をもじったり頓知のようなことをやったり、「芭蕉野分して」とか肩に力が入っていたのですが、この句はおだやかで日常だ

なあという気がします。こんな句が出てきたというのが、芭蕉もずいぶん変わってきたと思います。そうした日常の中から次の句が生まれました。

古池や蛙飛び込む水の音

談林俳句がゲラゲラ笑う笑いの喚起をめざしていたのに対して、おだやかなくすっとした笑い、芭蕉らしいユーモアを見出した最初の句といえるかもしれません。元々蛙を和歌で詠むときは、必ず河鹿蛙のきれいな声を読むのが約束でした。紀貫之の古今集の序文に「花に鳴くうぐひす、水に住むかはづの声を聞けば生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける」とあります。

芭蕉のこの句は、鳴く蛙ではなく、蛙がとびこんだぽちゃんという水の音を提示したというのが新しかったのです。和歌の美意識をふまえながら庶民的な新しい美意識を示そう、というのがこの句だったと思います。芭蕉の弟子たちは、くすりと笑い、新しい世界が開かれているな、と感じたんじゃないでしょうか。まさに、芭蕉が深川で仲間たちと過ごす日常のなかでうまれた句です。

蓑虫の音を聞きに来よ艸の庵

蓑虫は本当は鳴きませんが、枕草子のなかに、親に捨てられた蓑虫が「ちちよちちよ」と恋しげに鳴くといわれている。その声を聴きにおいでよ、草庵に、といっています。仲間との風狂を楽しんでいる、芭蕉の日常がうかがえます。そしてこの年の秋には、「笈の小文」の旅に出かけます。

旅人と我が名呼ばれん初時雨

野ざらし紀行の頃の悲壮感や構えは無く、芭蕉庵でのユーモラスな風狂の生活が、そのまま旅心になっているようです。旅に出たいな、旅人とよばれたいな、それも初時雨のころに。時雨は風流を代表するもの、その初時雨に会いにいこう、芭蕉と呼ばれなくてもいい、「あの旅の人」といわれて旅に出ようという句です。この旅は、関西方面、仲間や弟子たちに会いに行く心楽しい旅でした。

木曾の痩もまだなほらぬに後の月

芭蕉は、最初に自らを翁とよんだのは気取っていて老いの実感はなかったのですが、この頃から少しずつ肉体の衰えを感じ始め、徐々に本当に「翁」となってきたようです。笈の小文の旅の最後は木曽を巡るのですが、それでやつれて痩せてしまい、なかなか元に戻らないままに、名月を仰いでいるという句です。

春雨や蓬をのばす草の道

年が明けて46歳です。地味であまり知られていない句ですが、いい句です。パロディでもなんでもない、春雨という伝統的な季題に対して新しい嘱目というのを加えて、現代人が読んでも味わえる句です。

そしてこの年、いよいよ奥の細道の旅にでます。奥の細道の旅は、これまでの旅とはだいぶ違います。これまでは、ふるさとへ帰りたい、京阪神方面にたくさんいる芸術の理解者、知人を訪ねる、その目的の旅でした。奥の細道は、方角も逆の東北であり、目的も西行などの古人も訪ねた旧跡歌枕古戦場を訪ねて実際に見て、自ら歴史に触れてみたい、という衝動、芸術的な衝動に駆られての旅です。

旅の後、しばらく京阪神に滞在しているあいだに「軽み」ということを芭蕉はいいはじめています。それは、観念や理屈、風流ぶりはやめよう、古典とか故事に寄り掛かった句はやめよう、ということです。見たままそのまま感じたまま、素直なことばで詠む。それが「軽み」だと言っています。

次の句は江戸に戻り日本橋に借家住まいとしているときの句です。

鶯や餅に糞する縁のさき

縁先に餅が干してあり、そこに鶯が糞をした。古今集の序文にあったように「鶯」は風流を代表するもの、その声ではなく縁先で糞をした鶯を出して、和歌の美意識に対抗しながら日常風景をさらりと読んでいる。これが芭蕉の「軽み」でしょう。翌年5月には、弟子たちが芭蕉庵を新築してくれたので、移りました。

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏り

日常のなんでもない世界です。今日最初に見たのも雨漏りの句でしたが、その句となんと違うかというところまできました。日常的な言葉による、詩の創造の実践です。見たままのようですが、芭蕉の心情がじわじわと滲み出すところがあるのではないでしょうか。芭蕉50歳です。

翌年、芭蕉は最後の旅に出て大阪で亡くなりました。

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

芭蕉は、早々と自らを翁とよんで人生を演出しましたが、体が衰えてほんとうの翁となったときに、演出をやめて軽みをとなえ、自分の生涯を終えたのかなと思います。

平均寿命80歳を超える現代は、多くの人に芭蕉の享年を越えた先があります。今日は、日常のなかでどう俳句と向き合うのかということも芭蕉はたくさん教えてくれる、という切り口からお話ししました。

平成26年10月12日

於：江東区芭蕉記念館

ココにも歴史があった

民俗資料の展示

日頃生活で使用しているさまざまな道具。よく日進月歩といいますが、近年の技術の進歩には目を見張るばかりです。しかし、生活が便利になる一方で、道具への愛着は薄れていくような気もします。それぞれの時代を彩ってきた多くのモノたち。そんな時代を反映する民俗資料を、もう一度見つめ直すためのミニ展示です。

ひとつの時代を彩ったモノが役目を終えても、資料として残すことには意味があります。使われなくなって数十年を経たモノも、むかし使った人には懐かしさを、使ったことのない若い人や子供たちには、新しい発見を提供します。それらのモノは、実用性が失われたのちも、未来の人々にその時代を伝えるための大切な資料として、時の経過とともに時代を表わす歴史的・文化的な価値をもつようになるのです。

近年の著しい科学技術の進展により、さまざまなモノが大量生産され、私たちの生活を便利にしますが、その一方でモノに対する愛着は確実に薄れているような気がします。過ぎ去った時代のモノを見つめ直し、そこから何かを学ぶという姿勢を忘れてはいけないと考えます。

そのような観点から、区役所2階の「こうとう情報ステーション」において、文化財係保管の民俗資料を紹介するミニ展示を行っています。「ここにも歴史があった」と銘打って、昭和30～40年代に生活・生業（仕事）の場で使われたモノを中心に、昨年度は13回の展示を行いました（表参照）。

例えば、木場に生きた川並（筏師）が仕事で使った鳶口、カキ・アサリをむくための包丁、海苔を干す時に使用した海苔干し用のスダレなどは、当区の地域性を表わすモノとして貴重です。これらのモノは、江戸時代に木場が設定されたことや、魚介類が豊富な江戸前の海が目の前に広がっていたことに由来するもので、当区の歴史や文化を理解する上で欠かせません。

ミニ展示ではありますが、それら貴重な資料を紹介しつつ、区内に生きた人々の生活・生業などの歴史をいまに、そして後世に伝えていくために実施しております。

ご来庁の際には、ぜひ一度ご覧ください。

平成26年度
こうとう情報ステーション展示内訳

回	展示品	回	展示品
1	鳶口　2点、古写真「繁栄橋付近を歩く川並」1点	8	海苔簀　2点、海苔付け枠　1点
2	火消し壺　1点	9	羽子板　5点
3	鰹節削り器　2点	10	亀戸天神の鷽　11点、絵葉書「亀戸天神社旧本殿」　1点
4	氷削器　1点	11	亀戸銭座鋳造の寛永通宝　6点
5	カキむき包丁　3点、アサリむき包丁1点、 *アサリ・むき痕のあるカキ	12	おろし器2点（陶製1、アルマイト製1）、すり鉢1点、 すりこ木1点
6	手鉤・刺　各2点	13	置き薬箱　2点
7	湯たんぽ（陶製1、金属製1）	－	―

＊千田遺跡および門前仲町一丁目遺跡出土資料

5回展示

8回展示

13回展示